

万人の縁起を担ぐ宝船熊手

「よし田」大女将 吉田啓子さん

「よし田」女将 吉田京子さん



新しく事を始める際に多くの日本人は縁起を担ぐ。

そして商売繁盛や開運を願って縁起物を求める。

それは日々の生活に因果や関係性を重視する文化が息づいていることを物語っている。

11月に開かれる酉の市で販売される代表的な縁起物が熊手だ。

伝統的な技法で唯一無二の宝船熊手を作り続けている店が浅草にある。

浅草・鷺神社の酉の市の期間だけ境内で販売される、幸福をかき集める華やかな宝船熊手。

その作り手が「よし田」の大女将・吉田啓子さんと女将・京子さん母娘だ。

PROFILE

浅草 よし田

浅草・鷺神社の酉の市で売られる唯一の宝船熊手の製造販売店。毎年、酉の市の期間に1700～1800本の宝船熊手を売り切る。江戸時代から伝わる代々の技法を受け継ぐ大女将の吉田啓子さんは、日本名工会の職人に認定されている。

WEB

<http://yosidaya.hp.infoseek.co.jp/>

浅草で受け継がれる唯一の宝船熊手

「縁起」という言葉はもともと仏教用語で、他との関係や因果が「縁」となって物事が起こるという意味だ。一般に吉凶を導くきっかけの意味で用いられる。

多くの日本人は、新しく事を始める際に縁起を担ぎ、商売繁盛や開運、家内安全などを願って七福神や招き猫、お多福などの縁起物を買って求める。

毎年11月の酉の日に各地の鷺神社で開かれる酉の市。この祭礼に欠かせない縁起物が、その形から福や金を「かき集める」道具に見立てられる熊手だ。

熊手にはいくつかの種類があるが、江戸時代から受け継がれてきた手法で、熊手全体を宝船に見立てた赤物(※1)を作っているのは、浅草「よし田」のみ。同店の宝船熊手は浅草・鷺神社の酉の市の間しか売り出されないこともあり、希少価値の高い縁起物として人気が高い。

「昔は7~80軒のうち20軒は赤物と青物(※2)を半分ずつ売ってただけど、赤物は手がかかるんですよ。それでみんな嫌になっちゃったんじゃないかな」

そう話すのは「よし田」3代目女将で、現在「大女将」と呼ばれる吉田啓子さん。大正10年生まれで86歳。着物姿で歯切れのよい下町言葉を操る啓子さんは、熊手職人になったきっかけを次のように語る。

「主人が鳶職で熊手も作っていました。戦時中

いったん製造をやめてましたが、私が嫁に来てから本格的に熊手づくりを始めたんです。自分でやれば着物の一枚も買えるっていうので、欲にひかれて始めたんですよ。内職がわりに手伝っていたんだけど、本職になっちゃった。主人が亡くなっちゃったもんでね」

その後、長女の京子さんが伝統の技を継ぎ、家族で宝船熊手を製造販売している。その京子さんは「自然に職人の世界に入っていましたね。小さい頃から親の仕事を見てきたから、良さがわかるんです」と話す。

現在プラスチック製の熊手がほとんどを占めるが、京子さんが「うちは戦前から同じものを作っているのだから、発砲スチロールやプラスチックを一切使っていないんです」と説明するように、「よし田」の宝船熊手は飾りに人工素材は一切使っていない。素材は昔ながらの紙と竹だけだ。

下絵の型抜きから彩色、面相(顔描き)、七福神や鯛などの刺し込みなど、「よし田」ではすべて職人による手仕事だ。ひとつのパーツを作るだけで時間と労力がかかるので、酉の市が終わった日から、一年がかりで次の年に売り出す熊手の製作が始まるという。

伝統の技術の継承と母娘の呼吸

宝船熊手には、七福神や財宝、鯛などが描かれている。色彩は鮮やかで、七福神の表情は明るい。代々伝わる絵の色や形、人形の面相には見本があるという。

「父が作った見本がひとつあって、最初はそれを見ながら作りましたが、慣れてくると見本を見なくてもできるようになりました。色や形が身体に身についたんでしょうね」と京子さん。

宝船熊手の特徴のひとつは、全体に赤い色を使っていることだ。京子さんは「赤物の赤色は、日常にない色なんです」と説明する。それを受けて啓子さんがつなげる。

「昔はこの赤色がなくて、50年前くらいはロータミン(※3)とオーラミン(※4)を混ぜ、そこにニスを入れてかきまわして自分でこしらえたんです。今は熊手用の絵の具があるんだけど、その絵の具を作る人もいなくなっちゃうんですよ」

人形の面相も「よし田」の大きな特徴だ。力強く豊かな微笑をたたえた、どこかユーモラスな七福神の顔のポイントは、目と口だという。

「面相は大変ですよ」と啓子さん。「ほんとにちょっとのことなんだけど、表情が変わるのよ」熊手づくりはチームワークが大切だ。

「人形に色を塗ってもらって、私はちょうど今、着物の模様を描いている。ひとつのものをこしらえるのに、みんなの手が加わるんですよ」と啓子さん。間髪入れず京子さんが「そう、男衆には土台を作ってもらおう。そうして熊手が成り立っていく。売ることだけが大事ではないですよ」とつけたす。この母娘の掛け合いがまた絶妙だ。

浅草・鷺神社の酉の市で「よし田」が目玉を集めるのは、宝船熊手の完成度の高さや華やかさだけでなく、この阿吽の呼吸を見せる魅力的な二人が売り場に立つからなのだろう。

縁起物を粋に買うのが江戸の粋

啓子さんと京子さんは、酉の市の間に常連さんと再会する。これがとても楽しい時間だという。

「お客さんは私の顔を覚えてくれているんですが、私は残念なことに『どちら様でしたっけ?』なんて時もあって…」と啓子さんは笑う。酉の市では啓子さんに握手を求める人も多いという。

「あたしゃ神様でもなんでもないんだけどね。お客さんは「元気ですか」と言って手を握って喜んでくれる。たまに記念写真を一緒に撮ったりしますよ。遠くからご指名でいらっしゃる方も多いので」

売る側と買う側が掛け合って値決めをするのが、酉の市の熊手販売の特徴だ。だから自然に活気生まれる。

「お客さんからすれば、まけてもらうということ



京子さんは「仕事の楽しさは、毎年毎年上達してくるのがわかることです。去年より今年のほうがいいし、今年より来年のほうがいい。徐々に、ですが」と話す。



人形の着物に小さな模様を入れる啓子さんの手



左から右に向かって、3寸、5寸、6寸と大きなサイズになる。宝船に載る宝物や人形は大きさによって決まっている。

とりのいち 酉の市

毎年11月の酉の日(十二支の酉にあたる日)に開かれる、各地の鷲(おおとり)神社の祭礼。開運、招福、商売繁盛を願う、江戸時代から続く祭りとして名高い。日のめぐりあわせにより、11月の酉の日は2回の年と3回の年がある。最初の酉の日を「一の酉」、次を「二の酉」、3番目を「三の酉」と呼ぶ。酉の市で縁起物を買う風習は、関東地方特有の年中行事。

おおとり 浅草 鷲 神社

「酉の市」起源発祥の神社。天日鷲命(あめのひわしのみこと)と日本武尊(やまとたけるのみこと)を祀っている。11月の例祭「酉の市」(酉の祭)は、来る年の開運、授福、殖産、除災、商売繁盛をお祈りする祭り。江戸時代後期から最も著名な酉の市として知られており、熊手店約150店、露店約750店、約80万人の動員と日本一の規模と賑わいを誇っている。今年は11月11日(日)に一の酉、11月23日(金・祝)に二の酉が開かれる。
<http://www.otorisama.or.jp/>



はお客さんが『勝つ』ということですから縁起がいいんです。こういう買い方ができるのは熊手くらいしかありませんね」と京子さん。

一説には縁起物は値切ってもよいが、値切った分をご祝儀として店に渡すのが粋な買い方とされている。啓子さんが洒脱な江戸小唄のようなエピソードを話してくれた。

「おなじみさんに、いつも5円で熊手を買ってくれる人がいます。『5円(ご縁)がある』と縁起を担いでいるわけですが、ご祝儀を5万円くらい出してくれるんです。そのお客さんはまだお若いのに『そういう買い方をしたい』と最初から決めて来られるんです。格好いいですよ、そりゃ」

近年、酉の市では子どもや若者に人気のあるキャラクターを用いた熊手も販売されているが、啓子さんは違和感を覚えないう。『珍しくて眺めています。いろんな熊手があつていいんじゃないですか?』と気にしていない。

あたしゃ神様でもなんでもないんだけどね。
お客さんは「元氣ですか」と言つて
手を握つて喜んでくれる。



仕事をする手を休めずに「あたしゃねえ、洋服を着たことがないの」と話す啓子さん。この着物姿が啓子さんのトレードマークでもある。

京子さんが「一方に新しい熊手があり、同時にうちのような古い熊手もある。いろんな熊手があるから酉の市は楽しいですよ」と話すと、すかさず啓子さんが「でも、うちの熊手を伝統的だと思わない人もいる。こういう新しい熊手もあるんだって思つて買いに来る若い人もいらっしやるんですよ」とコンビの掛け合いのように畳み掛ける。

地味な作業の積み重ねから生まれる

「昔から熊手はお金をかき集める道具だつて言ってますけど、それだけじゃなくて、幸せもかき集めないでダメだし、家内安全でないと幸せじゃないしね。まあ、いいことも悪いこともあるのが人生ですよ」と啓子さん。

京子さんは「中には『去年、熊手を買ったけど、今年はあまりいいことがなかった』つておっしゃる人がいますが、『大難を小難に収めて、ここに来られるだけで幸いだったのよ』と声をかけると、納得されますよ」とにこやかに話す。

現在、京子さんの長男が「よし田」の見習いに入っている。京子さんは「家業を手伝えと強制はしませんでした」と振り返り、女将の厳しさを見せる。

「削る、描く、組み立てるなどのほかに、道具の使い方を覚えるなど、何でもできなければこの仕事は務まらない。根気強さも大切。でも、売るのは1年に1回。あとはコツコツした作業です。息子はそれを承知した上で決めたのでしよう」

最後に京子さんは「一度お客さんになって酉の市の楽しさを味わってみたい」と大声で笑った。熊手は売れるほどあるが、「お客さんとして大きな熊手を担いで帰りたいですよ」とは、京子さんも洒脱だ。

今年も酉の市の季節がやってくる。大きな縁起物を買って誇らしげに境内を歩くもよし、酉の市を初めて体験する人は小さな熊手を買ってことから始めるもよし。どちらにしても「縁」を起こすきっかけがそこにある。

Text by : 綾瀬良太

- ※1 飾り物のパーツが手作りで、一見して全体が赤く見えることから赤物と呼ばれている。七福神や財宝などを配し、熊手全体を宝船に見ているのが特徴。
- ※2 機械で飾り物を作り、上部に緑の松を飾ったものが多かったことから命名。飾り物にはおかめの面や大判小判、松竹梅、鶴亀などが配してある。
- ※3 緑色の光が当たるとオレンジ色の蛍光を出す蛍光色素。
- ※4 塩素性合成染料のひとつで、黄色の着色剤として用いられる。